



## パッチワーク印刷で ドキドキがいっぱい♥

成田 久 | HISASHI NARITA

仕事ではカワイイ系もクール系もやる僕ですが、今回は徹底的に“自分系”でつくってみました。ふだんの仕事では絶対できないような、僕の中にあるハデなものをぜ〜んぶ出しちゃいます！僕の顔をモチーフに、印刷のワザを駆使してどんなことができるかトライした結果、ドキドキする表現をいっぱい詰めこんだ、パッチワークみたいな作品が出来上がりました。

## ABOUT TRIAL

トライアルについて

### ●作品づくりの背景

最近、銀座7丁目のSHISEIDO THE GINZAのフリーペーパー『ギンザドキドキ』のアートディレクションと編集長をしています。そこでいつも悩んでいることがありました。それはイメージしている質感と求めるハデさがなかなか両立してくれないということです。ハデなビジュアルでお客様に毎回楽しんでいただきたい、でも質感はニュースペーパーのようなざらざらした感じがいいと思ってチャレンジしているのですが、なかなか思うようにならないんですね。どうすればいいのかと思っていたらちょうどその時、グラフィックトライアルのお話をいただきました。

だから最初は『ギンザドキドキ』の表紙のようなイメージでトライアルを考えていたんです。ある意味、仕事の延長線上という感じですね。ところが、凸版さんと初顔合わせの時、「成田さんには成田さんらしいものにトライしてほしいです」って言われて、「あ、そうか」って。発想を変えたほうが面白いのかなと気が付いたんですね。

というのも、僕の日常の仕事は化粧品の宣伝で、中心になるのは女優さんやモデルさんの肌の質感や美しさの、よりリアルな追求です。それはそれで面白い大好きですが、自分の作品とは違う世界だし、そこで使っている印刷という技術も仕事のための方法で、作品づくりとは違うラインにあるものと位置づけていました。でも、その印刷で、自分らしいものをやってみるとしても面白いかも、テキスタイルで展開していた自分の作品づくりを紙にしてみよう、って印刷で思いきりアートすることにしました。

### ●制作コンセプト

作品は、大好きな蛍光色をいっぱい使った、キャッチーでハデで狂っていてヘンで、とにかく自分色を詰め込みました。豊臣秀吉がお城を建てているようなイメージで、マリー・アントワネットがベルサイユ宮殿で踊っているような気分で作っています。僕の顔が三十三間堂の千手観音様みたいにかくさんあるようにしたい♥とPDの尾河さんをお願いして、出てきたものから選んで印刷でパッチワ



クしてもらった、という感じです。印刷で何をしたいかではなく、自分はこんなことがしたいというイメージがまずあって、それをどう印刷でできる？どんな印刷をすれば面白いことになる？と投げかけて一緒に作ったイメージです。

作品は、見ての通り。僕の顔です。自分の中の“ハデ”を出しきるには、自分を使っちゃった方がいちばんパンチもあるし、面白いし自由かな、って思ったので。

実は、グラフィックトライアルのお話をいただいたのと同じ頃、お店をつくる話の実現に向けて動き出していました。場所は東京・御徒町で、名前は“キュキュキュカンパニー”。これまで毎回スタイルを変えながら展開してきた作品を一挙に見ることができて、しかも買うことができるお店です。つまり僕がいっぱい詰まったお店！展覧会と同じ時期にオープンすることになったので、ちょっとコラボレーションしているような気分もありました。

ちなみに、自分の顔を使い始めたのはJAGDAの2人展がきっかけです。「顔で柄ができるじゃん！」と気づいてからは、スニーカーやアロハシャツなどに展開して一つのジャンルのようになった、いわば“自分系”の作品です。僕のビジュアルを、キャラクターみたいな感じに「誰だか知らないけど、コレが好き」って面白がってもらえたらいいな、って思っています♥



# 01

## 顔表現のテスト

「僕がプロフィールで使っているアイコン化した“顔”を、印刷技術で面白くしてください！とPDの尾河さんをお願いしてみました。気持ち悪い顔、アブノーマルな顔、キラキラな顔、ハデハデな顔…、いっぱい顔をつくって、三十三間堂の千手観音像みたいなイメージにしたいと思いま〜す♥」

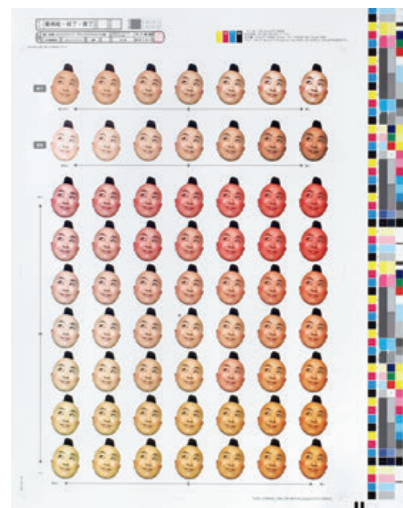
### 顔のチャートをつくる

1種類の顔の画像から、印刷技術だけで「ヘンな顔」「キラキラな顔」「ドキドキする顔」などのイメージを持つ「顔」をどれだけつくりだせるか。まずは普段の成田氏の仕事柄から、肌色の変化をチャートにすることにした。「健康的な肌色」「明るい肌色」をイメージさせる濃度の強弱と、「赤みがかった肌色」「黄みがかった肌色」をイメージさせるマゼンタ版・イエロー版の強弱の二つを軸にした。続いて「表情」をイメージさせる変化の幅を探るため、調子に硬軟をつけたり、インキを蛍光インキに置き換えたりした。また、「ハデハデ」なインパクトを狙って通常の印刷ではあまり用いられないような強い色の紙も採用した。

原稿



成田氏の顔のイラスト



白い紙に通常のプロセス4色を用いて製版技術だけで展開したもの。通常の4色分解を中心に、黄みがかった肌・赤みがかった肌をイメージして、肌表現の軸となるイエロー版とマゼンタ版の強弱でチャート化した。

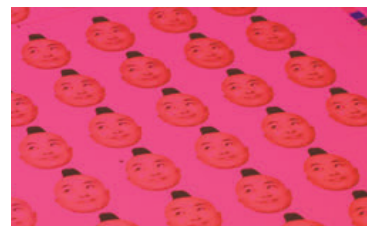
①プロセス4色による顔チャート



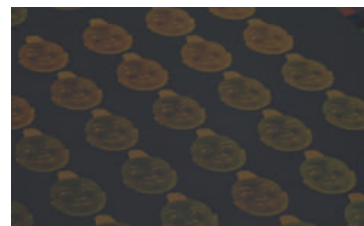
②蛍光ピンクの補色を足した顔チャート



③ピンクの紙による顔チャート



④黒い紙による顔チャート



#### 補色版

プロセス4色で表現しきれない彩度の高い色などを再現するときに、色を補う役割として追加で使用するインキ・版のこと。

①プロセス4色による顔チャート



マゼンタ版：強 ノーマル イエロー版：強

②蛍光ピンクの補色を足した顔チャート



補色：ノーマル 補色：強 補色：かなり強



補色のみ：ノーマル 補色のみ：強 補色のみ：かなり強

プロセス4色に通常の刷り順（K→C→M→Y）で一般的なコート紙に印刷したもの。もともと繊細な色表現が要求される肌色だが、こうして並べてみると製版上の強弱だけでこれだけ大きく変化することがわかる。

イラストなど、彩度の高い色の原稿を再現するときに多用される、蛍光ピンクの補色版を活用したチャート。彩度の高い赤みが際立って見える。

③ピンクの紙による顔チャート



マゼンタ版：強 ノーマル イエロー版：強

④黒い紙による顔チャート



マゼンタ版：強 ノーマル イエロー版：強

プロセス4色のうちのシアン、マゼンタ、イエローをそれぞれ蛍光インキに置き換え、蛍光ピンクの紙に刷ったもの。強い紙色により刷り色や調子の変化がほとんどわからないが、ハデな印象はもっとも強い。

プロセス4色のうちのシアン、マゼンタ、イエローをそれぞれ蛍光インキに置き換え、黒い紙に刷ったもの。インキ本来の色が紙色に影響され、ソラリゼーションのような効果となった。

### 色紙をベースにした顔をつくる

蛍光色の紙にカラフルな背景と顔が並ぶという基本イメージが決定。色紙でどんな顔の表現ができるかを試すことになった。まずは緑の紙。白い紙に印刷する時と同様のCMYKではなく、紙の緑を形成するシアンとイエローを減らした設計で表現している。

逆に、肌色の再現にこだわらず、個性的な紙色を前面に押し出したものや、オペークホワイトで紙色を隠ぺいした上の肌色の再現にも挑戦した。



想像以上に全体が緑っぽくなってしまった。どの色も緑に負けてしまい、特に補色である赤系は濁った色にしかならない。オペークホワイトの2回刷りでも隠ぺいするのは難しい。用紙：イルミJ（グリーン）

#### コート紙

印刷適性を上げるために、白土などの鉱物質顔料を塗工し表面を平滑にした紙。

# TRIAL PROCESS

トライアルプロセス

Art Director 成田 久 × Printing Director 尾河 由樹

# 02

## 背景色のテスト

「5枚のポスターにたくさんパンチの効いた色があったらきつとすごくオシャレですよ。あっちにもこっちにも同じピンクがあるのに、実は紙色は全然違う色だったり、印刷だと思ったら紙色だったりするのがいいな。見た人がキャーッ♥って驚いちゃうくらい、元の紙色がわからないところまで背景をつくりこんでみます」

### 背景色のチャートをつくる

オレンジ、緑、イエロー、ピンクの蛍光色と白の5種類の紙で、同じ背景色を表現する実験。まずはそれぞれの紙色を含む11色の背景色を設定、その11色をどの紙でも表現できるようにするため、11種の色をの掛け合わせのチャートを作成した。紙色を極力生かした設計にしたが、かけ離れた色は表現が難しいと想定し、オペークホワイトを下引きした部分もつくった。



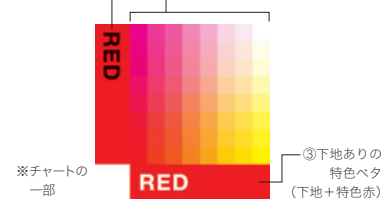
用紙：ヴァンヌーボスムース-FS

イメージしている色を白い紙に印刷したもの。他の色紙でもこの発色を目指す。

#### ●データの仕様

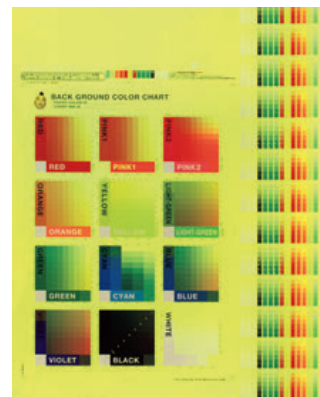
中心はオペークホワイトの地下なしのプロセス2色による掛け合わせチャート(①)。紙色の上にプロセスインキのみで表現できるかをテストする。表現が困難な場合を想定し、掛け合わせベタの下にオペークホワイトを引いた部分も作成(②)。それでも困難な場合を想定し、下地の上に特色ベタという部分(③)もつくった。

②下地ありの2色ベタ (下地+M+Y各100%)      ①2色による掛け合わせチャート (この場合はMとYによるチャート)

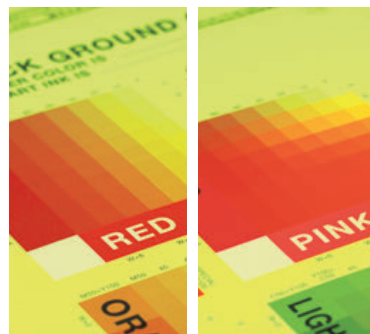


※チャートの一部      ③下地ありの特色ベタ (下地+特色赤)

#### ●今回指標とした背景色は下記11色



用紙：イルミU (イエロー)



左：M0~100%×Y0~100%  
右：M0~100%×特色ピンク0~100%  
マゼンタとイエローの掛け合わせよりもマゼンタと特色ピンクの掛け合わせの方が鮮やかな赤になった。



C0~100%×M0~100%  
緑は鮮やかに表現できたが、補色である紫は、オペークホワイトの地下なしではどうしても表現できなかった。

#### ベタ

濃淡や白く抜けた部分が無く、塗りつぶされた状態のこと。網点印刷物では点の大きさが最大となる100%の状態。



用紙：イルミカラー (桃)



蛍光ピンク0~100%×特色ピンク0~100%  
イエローの紙同様、ピンク同士の掛け合わせが、鮮やかで濃度のある赤になった。



K100%×W0~6回  
黒はオペークホワイトで紙色を隠べいと、逆にインキをはじめてムラが出てしまった。



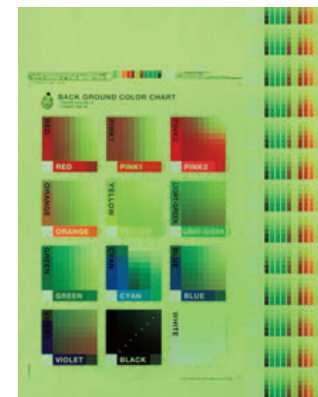
用紙：イルミU (オレンジ)



蛍光ピンク0~100%×特色ピンク0~100%  
特色ピンクを刷り重ねることにより、鮮やかな赤が表現できた。



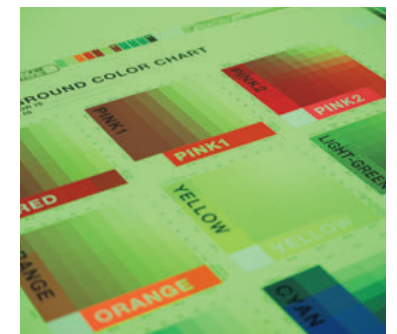
緑、シアン、紫、イエローなど赤系の色以外は、紙色が強烈過ぎて表現が難しい。



用紙：イルミU (グリーン)



C0~100%×Y0~100%  
紙色との相乗効果で、非常に発色のいい緑になった。画像はプロセスインキ。蛍光インキでの掛けあわせでは逆に鮮やかさが出ず浅い印象になった。



補色関係にある赤・ピンク・オレンジ系は紙色の影響から逃れられず、オペークホワイトで完全に隠べいしな限り表現することはできなかった。



# FINISH

全作品とディテール



Art Direction : 成田久





用紙：ヴァンナーボスムース-FS 四六判 180kg  
 版の構成：特色ピンク（2回刷り）→特色イエロー（2回刷り）→特色緑（2回刷り）→特色緑→スミ→シアン→マゼンタ→イエロー→スミ→蛍光シアン→  
 蛍光マゼンタ→蛍光イエロー→蛍光マゼンタ→蛍光オレンジ→特色赤→特色赤→特色赤→特色赤（2回刷り）→特色オレンジ→特色オレンジ（2回刷り）→  
 特色ブルー→グロスニス



用紙：イルミU/イエロー 四六判 80kg  
 版の構成：オペークホワイト→オペークホワイト（2回刷り）→オペークホワイト（2回刷り）→スミ→シアン→マゼンタ→  
 イエロー→スミ→蛍光シアン→蛍光マゼンタ→蛍光イエロー→シアン→蛍光シアン→蛍光オレンジ→蛍光マゼンタ→蛍光マゼンタ→蛍光マゼンタ→蛍光緑→蛍光緑→  
 蛍光緑→特色赤→特色赤→特色赤→特色ピンク（2回刷り）→特色ピンク→特色オレンジ（2回刷り）→特色ブルー（2回刷り）→グロスニス





用紙：イルミカラー／桃 四六判 69kg  
 版の構成：オペークホワイト→オペークホワイト→オペークホワイト→オペークホワイト（2回刷り）→オペークホワイト（2回刷り）→オペークホワイト（2回刷り）→スミ→シアン→マゼンタ→イエロー→スミ→蛍光シアン→蛍光マゼンタ→蛍光イエロー→スミ→スミ→スミ→蛍光オレンジ→蛍光マゼンタ→蛍光イエロー→シアン→蛍光シアン→特色ピンク→特色ピンク（2回刷り）→特色イエロー→特色イエロー→特色オレンジ→特色オレンジ（2回刷り）→特色緑（2回刷り）→特色緑



用紙：イルミL／オレンジ 四六判 80kg  
 版の構成：オペークホワイト→オペークホワイト（2回刷り）→オペークホワイト（2回刷り）→オペークホワイト（2回刷り）→スミ→シアン→マゼンタ→イエロー→スミ→蛍光シアン→蛍光マゼンタ→蛍光イエロー→シアン→シアン→蛍光シアン→蛍光シアン→蛍光マゼンタ→スミ→スミ→スミ→特色ピンク→特色ピンク→特色緑→特色緑→特色緑→特色赤→特色イエロー→特色イエロー





用紙：イルミル/グリーン 四六判 80kg  
 版の構成：オペークホワイト→オペークホワイト（2回刷り）→オペークホワイト（2回刷り）→スミ→シアン→マゼンタ→イエロー→スミ→蛍光シアン→蛍光マゼンタ→蛍光イエロー→蛍光マゼンタ→蛍光オレンジ→シアン→蛍光シアン→特色赤（2回刷り）→特色赤→特色ピンク（2回刷り）→特色ピンク→特色オレンジ→特色オレンジ→特色イエロー（2回刷り）→特色ブルー（2回刷り）→グロスニス

## AFTER TRIAL

トライアルを終えて

### ●トライアルを終えて

印刷でこんなことをするなんて自分では考えていなかったし、できるとも思っていませんでした。だから凸版さんからお誘いが来た時は「これってビッグチャンスかも♥」という感じだったんです。だって、やりたくても簡単にできることではないし、印刷でここまでクオリティが高いことができるなんて想像していませんでした。思いきり贅沢に印刷で遊んじやった、という気持ちです。

正直なところ初めのうちは、「印刷？僕は関係ないじゃん」くらいのスタンスで、割とクールに構えていた自分がいたんです。それが変わったのはチームで作戦会議をし始めてから。PDの尾河さんたちが次々と球を投げてきて、それに応えて投げ返すうちにどんどん盛りあがってしまいました。しかも最初は「こんな感じにしたい」程度の漠然としたイメージだったものが、実験でどんどんリアルになっていくので自分のテンションもますます上がりましたね。普段の作品づくりでは最初から最後まで自分一人でやることが多いけれど、こうして印刷とコラボレーションすることで、自分の想像を超えたこともたくさん出てきたように思います。印刷でどれだけ僕をギャフンと言わせてくれるかなとワクワクしながら、最後まで楽しませてもらうことができました。

おかげさまで、紙の領域でできることの可能性が見えてきました。これまで作品はテキストスタイルでつくってきたけれど、印刷物での作品も僕の新しいジャンルになりそうです。テキストスタイルの作品はすべて1点物だけれど、これは量産可能。これも僕にとっては新しいアートのかたちといえるのかもしれない。プロダクト展開などにも繋がっていきそうだし、新しい可能性が見えたような気もするし、印刷で「つくってみたい」「やってみたい」ものが次々頭に浮かんできて、いろいろ妄想しています。

僕に新しいきっかけをくれたグラフィックトライアル。おかげさまでほかの作品と一緒に並べたいと思う作品ができました。

——成田 久

### ●プリンティングディレクターから

成田さんのイメージをどう印刷のコンセプトに置き換えていくかが大仕事でした。原稿は成田さんの顔1点のみ、これで「なんでもやっちゃってください」というリクエストです。ある意味なんでもできるし、方法も数限りなくありますが、それをどう絞り込んでいくかその後の流れも大きく変わります。成田さんから預かった顔のイメージに、ハデさの裏にスマートさやクールさを秘めた成田さんらしさを引き出しながら、そこに私なりの印刷へのこだわりをうまく合わせていければと思いながら取り組みました。

トライアル参加は今回で4回目になりますが、今までになく考えることが多く、相当苦労したというのが正直なところです。特に蛍光色の紙は、普段の仕事でもまず使うことはないだけに面白いチャレンジでした。しかも顔の数は150点以上、表現のパリエーションも半端な数ではありません。5点並べて展示される事を意識し、紙色を覆い隠して製版したもの、紙色を利用して設計したものの、あえて紙色を前面に出したもの、また、中には引き立て役としての地味なものもあります。さらに5枚とも異なる色の紙を使いながら繋がって見せるために工夫も凝らしています。

成田さんの思い描くイメージを具現化しながら、PDとしてのこだわりをふんだんに盛り込んだ、これまでにないトライアルになりました。

——尾河 由樹

